説教要旨「何度だってやり直せる」

使徒言行録　１５章　３６～４１節

教会に問題はつきもので、問題のない教会はありません。いくつもの問題を抱えながらも、どうすれば良いのかと、あーでもない、こーでもないと悩みながら歩んでいるのが、教会の偽らざる姿です。そこでは問題が必ず起きます。けれども、問題が起こることは本当の問題ではなくて、その問題をどのように乗り越えるかが本当の問題なのです。

初代教会は、その成立の当初から問題続きでした。外側からの迫害に苦しめられる一方で、内側にも問題を抱えていたのです。

これまで共に手を取り合い、助け合って歩んできたパウロとバルナバの間にも亀裂が入りました。それはマルコと呼ばれるヨハネをバルナバが宣教旅行に同行させようとしたことで、マルコを連れて行くべきではないと考えるパウロと対立したためです。

このマルコと呼ばれるヨハネは、パウロたちが以前、宣教旅行に出たとき、途中で帰ってしまったことがありました（使徒 13:13）。途中で務めを放棄したマルコのことを、パウロはもはや信頼に値しないと判断したのでしょう。このためにマルコを同行させることに反対したのです。しかし、バルナバは若いマルコにもう一度チャンスを与えたかったのでしょう。そのためにパウロとバルナバは対立し、別々に行動することに至ります。

教会の伝承によればこのマルコは、使徒ペトロの弟子として、ペトロが行く所どこにでもついて行き、そしてペトロの語る福音を通訳して一緒に廻り、やがて「マルコによる福音書」を書き記したといいます。また後にパウロとも和解したことが、パウロが書き残したいくつかの手紙からうかがえます。

そもそもペトロも、パウロも、そしてマルコも、みんな信仰の失敗者、挫折者でした。このような失敗者、イエス様を、そして神様を裏切った者たちを、神様はあえて用いて、教会を建て上げていくのです。信仰の失敗者、挫折者をこそ、神様は憐れんで下さり、やり直すチャンスを与えてくださるのです。何度失敗しても、何度でもやり直しをさせてくださる神の愛に、わたしたちも包まれているのです。

（２０２２・１０・２　説教者：稲垣真実）